

やまなし

宮沢 賢治 作

かすや 昌宏 絵

小さな谷川の底を写した、二枚の青い幻灯です。

一 五月

二ひきのかにの子どもらが、青白い水の底で話していません。

「クラムボンは笑ったよ。」

「クラムボンはかぶかぶ笑ったよ。」

二枚

クラムボン
作者が作った言葉。
意味はよく分からない。

「クラムボンははねて笑ったよ。」

「クラムボンはかぶかぶ笑ったよ。」

上の方や横の方は、青く暗く鋼のように見えます。そのなめらかな天井を、つぶつぶ暗いあわが流れていきます。

「クラムボンは笑っていたよ。」

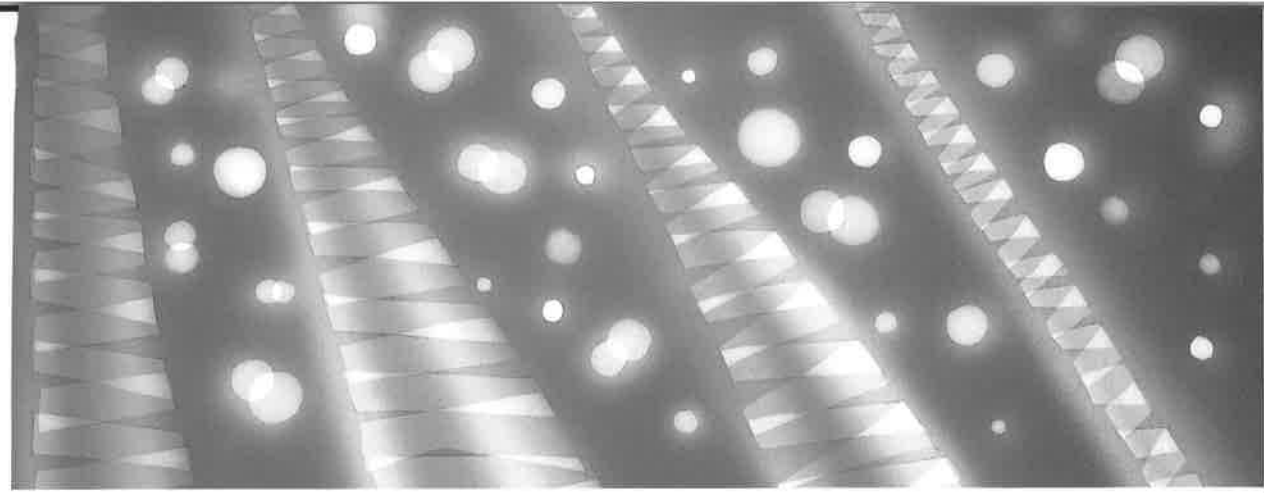
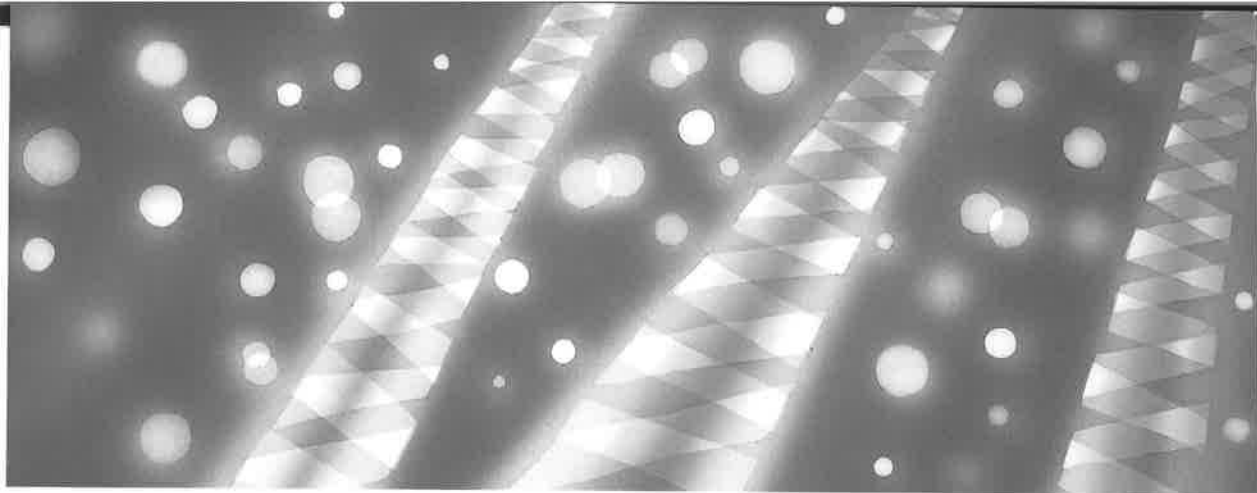
「クラムボンはかぶかぶ笑ったよ。」

「それなら、なぜクラムボンは笑ったの。」

「知らない。」

つぶつぶあわが流れていきます。かにの子どもらも、ぽつぽつと、続けて五、六つぶあわをはきました。それは、ゆれながら水銀のように光って、ななめに上の方へ上っていきました。

つうと銀の色の腹をひるがえして、一ぴきの魚が頭の上を過ぎていきました。



「クラムボンは死んだよ。」

「クラムボンは殺されたよ。」

「クラムボンは死んでしまったよ……。」

「殺されたよ。」

「それなら、なぜ殺された。」

兄さんのかには、その右側の四本の足のうちの二本を、弟の平べったい頭にのせながら言いました。

「分からない。」

魚がまたつうともどって、下しもの方へ行きました。

「クラムボンは笑ったよ。」

「笑った。」

にわかにはぱっと明るくなり、日光の黄金きんは、夢のように水の中に降ってきました。

波から来る光のあみが、底の白い岩の上で、美しくゆら

ゆらのびたり縮ちぢんだりしました。あわや小さなごみからは、まっすぐなかげの棒ぼうが、ななめに水の中に並んで立ちました。

魚が、今度はそこら中の黄金の光をまるつきりくちやくちやにして、おまけに自分は鉄色に変に底光りして、また上かみの方へ上りました。

「お魚は、なぜああ行ったり来たりするの。」

弟のかにが、まぶしそうに目を動かしながらたずねました。

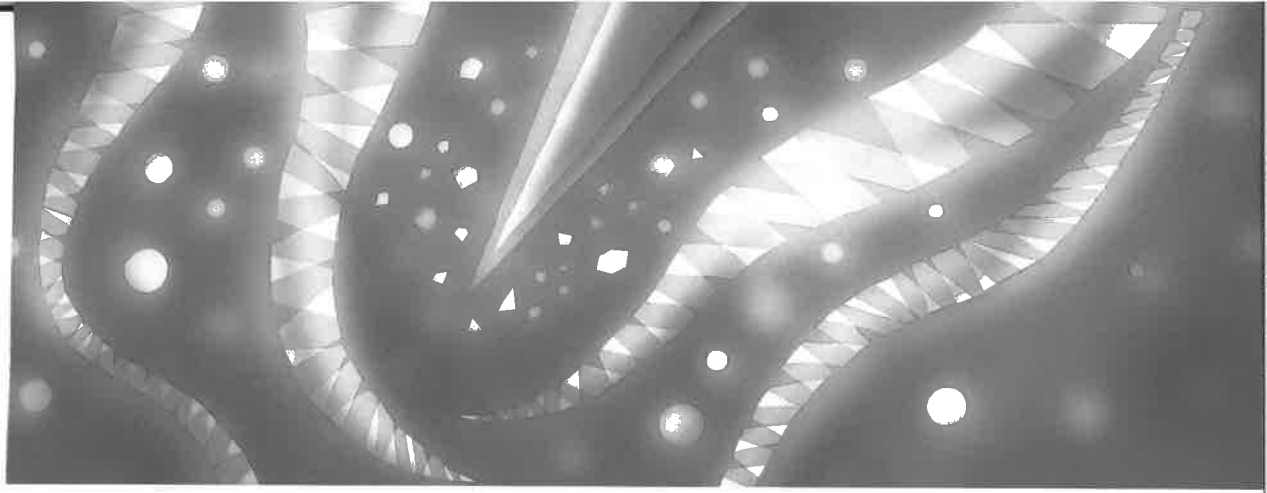
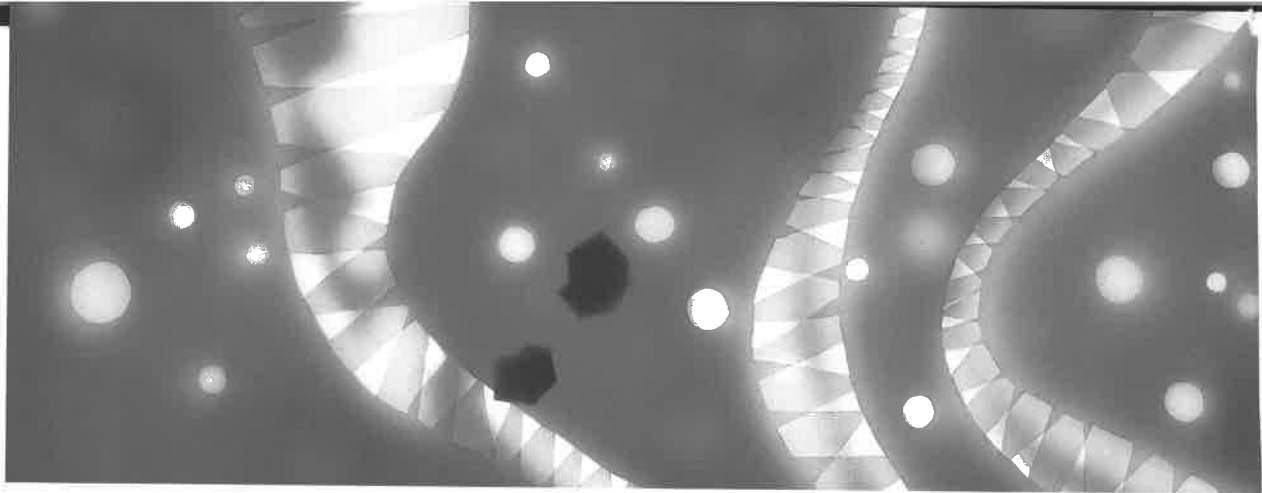
「何か悪いことをしてるんだよ。取ってるんだよ。」

「取ってるの。」

「うん。」

そのお魚が、また上かみからもどってきました。今度はゆっくり落ち着いて、ひれも尾おも動かさず、ただ水にだけ流されながら、お口を輪のように円くしてやって来ました。

○棒ぼう ○縮ちぢ
む



そのかげは、黒く静かに底の光のあみの上をすべりました。
「お魚は……。」

そのときです。にわか天井に白いあわが立って、青光りのまるできらきらする鉄砲^{ぼう}だまのようなものが、いきなり飛びこんできました。

兄さんのかには、はっきりとその青いものの先が、コンパスのように黒くどがっているのも見ました。と思ううちに、魚の白い腹がぎらっと光って一ぺんひるがえり、上方へ上ったようでしたが、それっきりもう青いものも魚の形も見えず、光の黄金のあみはゆらゆらゆれ、あわはつぶつぶ流れました。

ニひきはまるで声も出ず、居すくまってしまいました。
お父さんのかにが出てきました。

「どうしたい。ぶるぶるぶるえているじゃないか。」

「お父さん、今、おかしなものが来たよ。」

「どんなもんだ。」

「青くてね、光るんだよ。はじが、こんなに黒くどがっているの。それが来たら、お魚が上へ上っていったよ。」

「そいつの目が赤かったかい。」

「分からない。」

「ふうん。しかし、そいつは鳥だよ。かわせみというんだ。だいじょうぶだ、安心しろ。おれたちは構わないんだから。」

「お父さん、お魚はどこへ行ったの。」

「魚かい。魚はこわい所へ行った。」

「こわいよ、お父さん。」

「いい、いい、だいじょうぶだ。心配するな。そら、かばの花が流れてきた。ごらん、きれいだろう。」

10

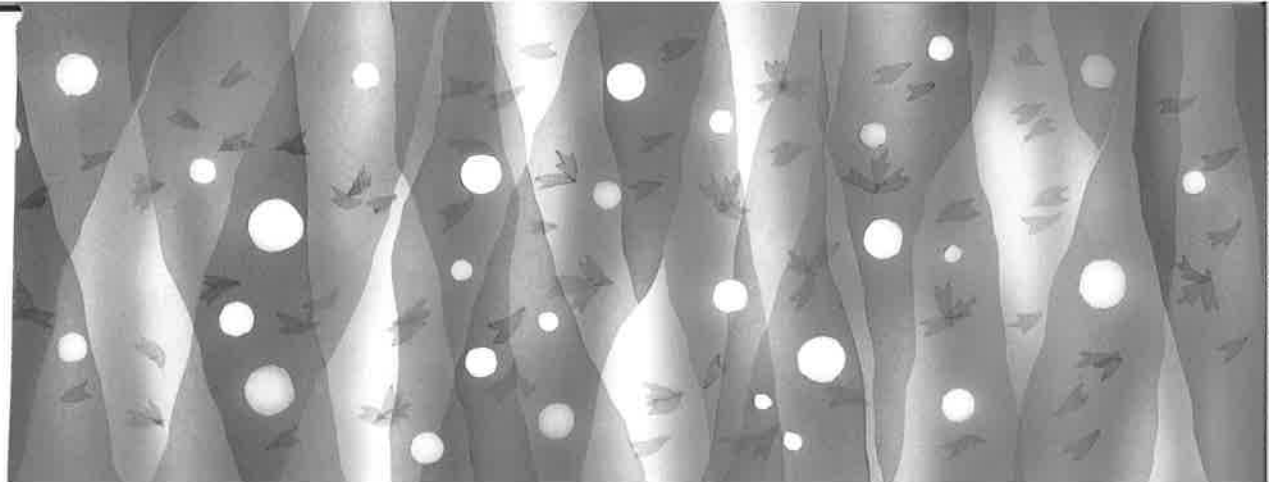
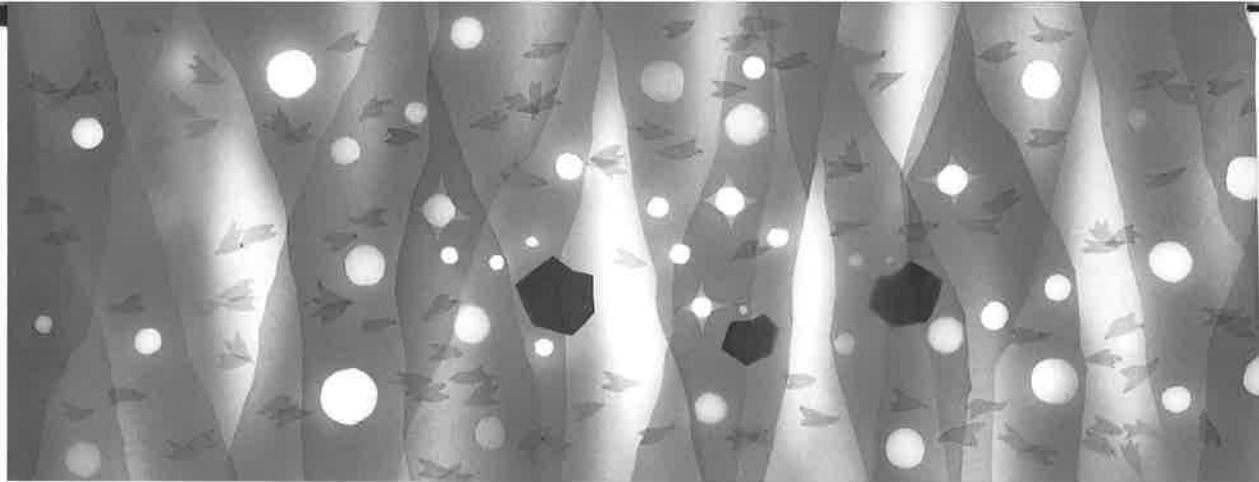
5

10

5

はじ
はし。物のふち、へりのこと。

かば
ここでは、山桜の一種。



あわといっしょに、白いかばの花びらが、天井をたくさんすべってきました。

「こわいよ、お父さん。」

弟のかにも言いました。

光のあみはゆらゆら、のびたり縮んだり、花びらのかげは静かに砂をすべりました。

二 十二月

かにの子どもらはもうよほど大きくなり、底の景色も夏から秋の間にすっかり変わりました。

白いやわらかな丸石も転がってき、小さなきりの形の水晶しじょうのつぶや金雲母かのかけらも、流れてきて止まりました。その冷たい水の底まで、ラムネのびんの月光がいっぱい

金雲母
黄色みをふくんだ、
褐色の雲母。

にすき通り、天井では、波が青白い火を燃やしたり消したりしているよう。辺りはしんとして、ただ、いかにも遠くからというように、その波の音がひびいてくるだけです。かにの子どもらは、あんまり月が明るく水がきれいなので、ねむらないで外に出て、しばらくだまってあわをはいて天井の方を見ていました。

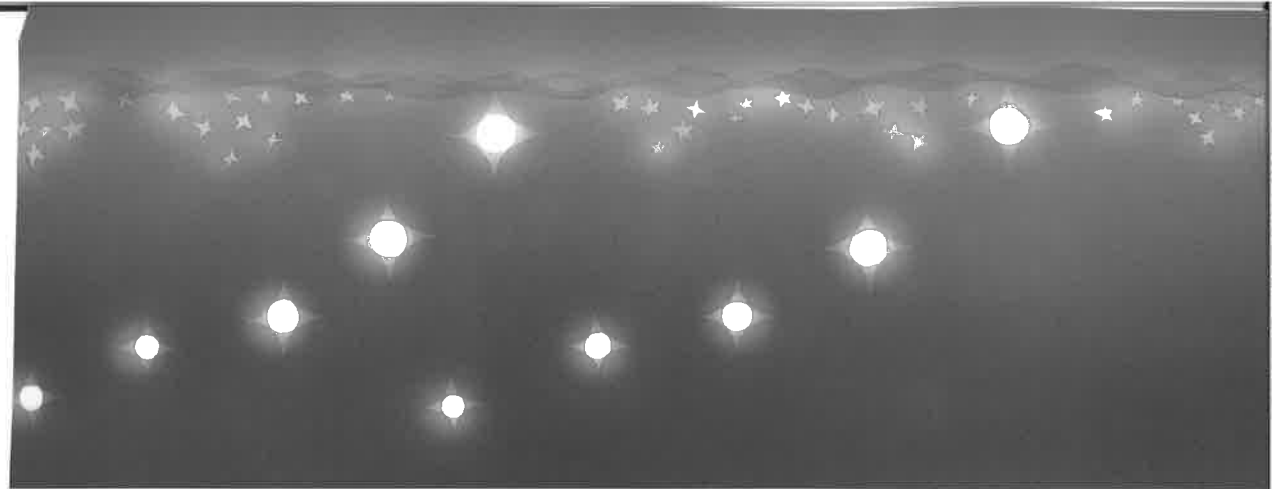
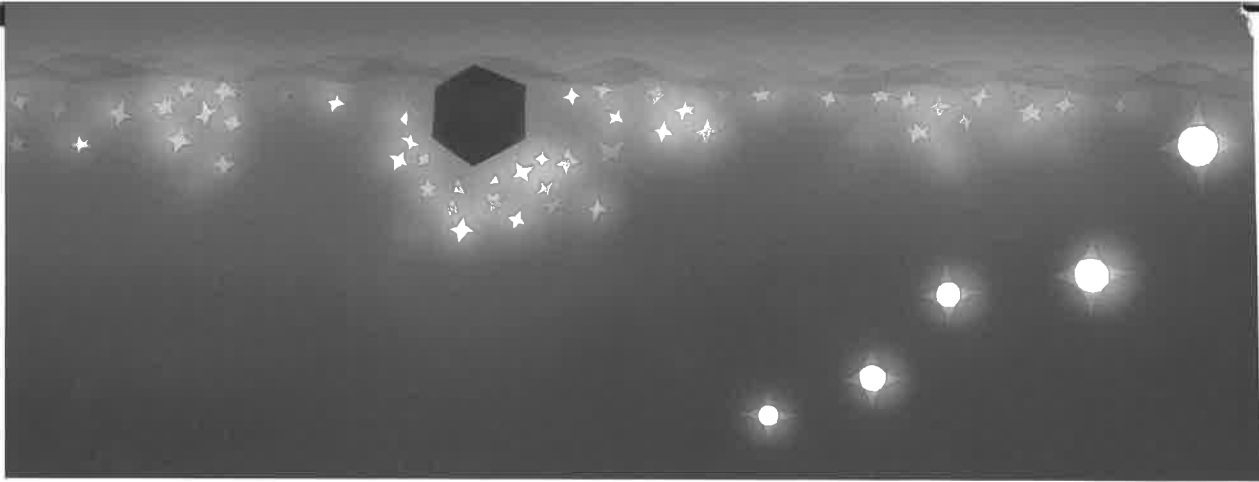
「やっぱり、ぼくのあわは大きいね。」

「兄さん、わざと大きくはいてるんだい。ぼくだって、わざとならもっと大きくはけるよ。」

「はいてごらん。おや、たったそれきりだろう。いいかい、兄さんがはくから見ておいで。そら、ね、大きいだろう。」

「大きかないや、おんなじだい。」

「近くだから、自分のが大きく見えるんだよ。そんならいっしょにはいてみよう。いいかい、そら。」



「やっぱりぼくのほう、大きいよ。」

「本当かい。じゃ、も一つはくよ。」

「だめだい、そんなにのび上がったは。」

また、お父さんのかにが出てきました。

「もうねろねろ。おそいぞ。あしたイサドへ連れていかんぞ。」

「お父さん、ぼくたちのあわ、どっち大きいの。」

「それは兄さんのほうだろう。」

「そうじゃないよ。ぼくのほう、大きいんだよ。」

弟のかには泣きそうになりました。

そのとき、トブン。

黒い丸い大きなものが、天井から落ちてずうっとしずんで、また上へ上っていきました。きらきらと黄金のぶちが光りました。

「かわせみだ。」

子どもらのかには、首をすくめて言いました。

お父さんのかには、遠眼鏡とつめがねのような両方の目をあらんかぎりのばして、よくよく見てから言いました。

「そうじゃない。あれはやまなしだ。流れていくぞ。ついていってみよう。ああ、いいにおいだな。」

なるほど、そこらの月明かりの水の中は、やまなしのいいにおいでいっぱいでした。

三びきは、ぼかぼか流れていくやまなしの後を追いました。

その横歩きと、底の黒い三つのかげ法師が、合わせて六つ、おどるようにして、やまなしの円いかげを追いました。

まもなく、水はサラサラ鳴り、天井の波はいよいよ青いほのおを上げ、やまなしは横になって木の枝に引っかかっ

イサド
作者が想像して作っ
た町の名前。

て止まり、その上には、月光のにじがもかも集まりま
した。

「どうだ、やっぱりやまなしたよ。よく熟している。いい
においだろう。」

「おいしそうだね、お父さん。」

「待て待て。もう二日ばかり待つとね、こいつは下へしず
んでくる。それから、ひとりでおいしいお酒ができる
から。さあ、もう帰ってねよう。おいで。」

親子のかには三びき、自分らの穴に帰っていきます。

波は、いよいよ青白いほのおをゆらゆらと上げました。

それはまた、金剛石の粉をはいているようでした。

私の幻灯は、これでおしまいであります。

10

5

金剛石

ダイヤモンドのこと。

宮沢 賢治

一八九六〜一九三

三年。岩手県生まれ。

童話作家・詩人。